

1 はじめに

ふるさと学習部会では、各小中学校における「ふるさと学習」の教材になり得る地域教材の情報収集とその教材化に向けて、今年度も取り組むことにしました。

今年度は、栃木市の各地域の中で、特産品や史跡、伝説が数多く見られる地域の一つである西方地域をクローズアップして現地調査を行い、情報収集とその教材化を進めていきました。今後の授業づくりのヒントになれば幸いです。

2 研究の方針

西方地域の特産物を販売している道の駅「にしかた」や、鉄造薬師如来坐像、八百比丘尼（おびくに）堂などの西方地域に残る史跡の現地調査を行い、調査で得られた情報をまとめた後に、他地域の小中学校で教材化するための活用のヒントを「活用メモ」としてまとめました。

3 西方地域の現地調査について

（１）道の駅「にしかた」にある地域の 特産物

農産物直売所「ふれあいの郷」では西方地域と鹿沼市の生産者管理組合に加入している約８０軒の農家から、新鮮な農産物が毎朝販売されています。生産者とは、インターネットでつながっているので、不足を確認するとすぐに対応できるようです。「とちぎ小江戸ブランド」に認定されている「**西方のニラ**」、「**桜おとめ（米）**」、「**真上の梅**」、「**とちおとめ**」は、西方地域を代表する農産物になっています。

農村レストラン「ふるさと一番」では、西方地域産の農産物を食材とした料理が味わえます。定食や丼ものには「桜おとめ」、そばには「西方そば」、カレーや天ぷらには西方産の野菜が使用されています。



11月29日（日）開催
「ど田舎にしかた祭り」



宇都宮大学との連携により「西方ニラ」や「真上の梅」を使った新メニューが開発・提供されています。また、ジェラートにも「とちおとめ」や「真上の梅」など、地元の農産物が多く用いられています。



活用メモ！



各地域で生産されている農産物などの特産品。ところで、その特産品は、なぜその地域に広がったのでしょうか。生産者はどんな工夫や努力をしているのでしょうか。子どもたちが生産者の方々に聞き取りをすることで、問題解決的な学習ができます。実際に学校で育ててみると、生産者の苦労を学ぶこともできます。

また、地元の特産品を使った新メニューを開発するのも楽しみです。

（２）鉄造薬師如来坐像

金井の薬師如来坐像と言われ、鎌倉時代に造られた鉄仏です。台座も鉄造で、江戸時代に造られました。心持ち面長で、静かな表情をしています。この像が造られた時期は、元寇のあった文永と弘安の間で、敵国降伏と五穀豊饒・衆病平癒・村里安全を祈願して造られたものと考えられています。



※国重要文化財指定

活用メモ！



各地域には、昔から伝わる文化財を大切に保存している方々がいらっしゃいます。この保存会の方々に聞き取りをすることで、文化財に対する地域の方々の願いや保存・継承するための工夫や努力を知ることができます。



（３）八百比丘尼堂（おびくにどう）

八百比丘尼尊像が安置されている「八百比丘尼堂」は、西方町真名子に伝わる八百比丘尼伝説ゆかりの地に設けられた公園の中にあります。公園内には、真名子八水の一つ「姿見の池（男丸の鏡水）」などがあり、季節感豊かな景色が楽しめます。この地域に伝わる伝説を紹介します。



昔々、子供のいない長者夫婦がいました。二人は庚申様に子供が授かるように祈ったところ、女の子が生まれ八重姫と名付けました。姫が7歳になったある日、白髪の老人が訪ねてきて、長者を家に招き庚申様と一緒に信心したいと申し出ました。長者は老人の家で不老不死の薬だといって煮た貝をすすめられましたが、肉食を絶っていたので、食べたふりをして、たもとに入れました。家に帰ってきた長者に、八重姫がすがりつくのと、たもとから貝の肉がこぼれ落ち、姫はそれを父がくれたものと思い食べてしまいました。やがて八重姫は18歳になり、美しく成長した姫のうわさを聞いた帝は都に召し出そうとしましたが、それを知った姫は家を出てしまいます。真名子の里を離れた姫は、山道で会った白髪の老人の家で暮らしていましたが、両親が恋しくなり家に帰りたいと告げました。すると老人は、ここを出れば二度と戻れないこと、自分が庚申であることを告げ、屋敷とともに忽然と姿を消してしまいました。真名子に帰り着いた姫は、家を出てから800年も月日が経っていることを知ります。途中、山のふもとの池で手を洗い、そこで姿を映してみましたが、18歳の娘のままなので信じられません。やがて姫は尼になり名を妙栄とあらためて巡礼の旅に出ました。そして長く生き過ぎた妙栄は、ついに若狭の海に身を沈めて命を絶ちました。以後、若狭では八百姫大明神、真名子では八百比丘尼様として祀られ、今に伝えられています。

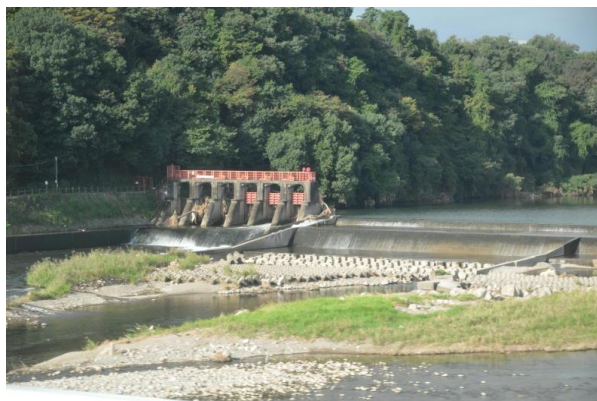


活用メモ！ 各地域には、地元で昔から語り継がれている不思議なお話があり、そのお話を大切に受け継いでいる語り部ボランティアの方々がいらっしゃる場合があります。語り部の方々の優れた表現力（強弱、リズム、間合いなど）は、とても参考になります。

また、「八百比丘尼伝説」のように、遠く離れた地域でも同じお話が語り継がれていることもあります。関連性を調べてみることも考えられます。



(4) 小倉堰



岩山を貫く用水

この小倉堰のおかげで、西方地域は水と緑に恵まれ、江戸時代から西方五千石とよばれる良質な米所です。西方産コシヒカリ「桜おとめ」は品質の高さに定評があり、江戸時代から江戸前寿司の「すし米」として重宝されました。

この小倉堰は、田畑に水を引くために造られ、西方地域の稲作を約400年にわたって支えてきました。しかし、洪水で流されることがたびたびあり、造り直すのに大変苦勞したため、水害から守ってくださる水神社を建てました。



水神社

小倉堰から取水された水は、巴波川に合流し、市の穀倉地帯を潤しています。この用水では、6月になると蛍が飛び交います。

活用メモ！



栃木市には、地域の人々の生活の向上に尽くした先人が数多くいます。その先人の取組や苦勞について知ること、その地域に対して誇りと愛情を育てることができます。

また、水神社は地域の守り神として建てられました。各地域の神社は、人々のどんな願いで建てられたのでしょうか。

(5) 河童伝説

小倉川に伝わる河童の伝説を紹介します。



小倉川かっぱ広場



「小倉川と河童」の案内掲示板

〈小倉川と河童〉

昔、小倉川（思川）は清瀬川とよばれていましたが、そのころは堤防も橋もなかったときで、旅人や辺りの人たちが歩いて川を渡ろうとすると、ときどき河童があらわれて人々を困らせていました。

ある日、西方城の重臣で小倉主膳介というお侍が愛馬を乗り入れ、川を渡ろうとすると、河童が踊りでて悪さをしました。

豪傑の主膳介はこの河童を捕まえ、一刀のもとに切り捨てようとした。すると河童は命だけは助けてほしい、と涙をうかべてあやまったので、「俺は小倉という者だ。今後、川を渡る者に小倉の名を聞いたら、決していたずらをするな。いたずらをする容赦しないぞ。」と言いふくめ許してやると、河童はあやまって淵のなかへ逃げていきました。

それを聞いた旅人が、川を渡るときに「俺は小倉だ。」「俺は小倉だ。」と言いながら渡るようになり、河童に悪さをされることがなくなりました。

それで、この川が小倉川と呼ばれるようになったと言い伝えられています。

（６）おばけの木

※左奥が西方小学校

一面に水田が広がる中に、ひときわ目立つ１本の木があります。この木は、小学生に「おばけの木」と呼ばれています。

近くで農業を営む人が、米の豊作を願う御神木として藤の木を植えたと言われるこの木には、次のような伝説や噂があります。



おばけの木（藤の木）

昔、この木を邪魔だと思ふ人がいて、木を切ろうとしたことがありました。しかし、金崎で医師の仕事をしていた方が、「この木は、御神木として植えたのだから、切ってはならない。」と、まわりの人を説得しました。その結果、この木は切られずに現在に至っています。

各農家の土地が分からなかった頃は、土地を区切る目印にも役立っています。昔は、正月や彼岸などに、餅やまんじゅうを供えたといひます。

当初は、藤の木として植えたが、現在は銀杏の木と絡まっています。藤の木の所には祠があり、祠と藤の木を囲むように椿の木が植えられています。

4 他地域に伝わる伝説

(1) 栃木の地名の由来

栃木市の「とちぎ」という名前の由来には、いくつかの説があるようです。紹介します。

【十千木（とおちぎ）説】

栃木町（現在の栃木市）内に神明宮という神社があり、社殿の屋根にある2組の千木（ちぎ）と8本の鰹木（かつおぎ）が、遠くから見ると10本に見えたことから、神社の辺りを「十千木（とおちぎ）」と呼ぶようになったという説。



【トチノキ説】

トチノキがたくさん生えており、それが転訛して「トチギ」になったという説。

【地形説】

栃木町（現在の栃木市）内を流れる巴波川は、かつてたびたび氾濫を起こしたことから、千切れた地形（浸食された地形）の動詞「チギ（る）」に接頭語の「ト」が付いたという説。

【遠津木（とおつき）説】

「古事記」に登場する豊城入彦命（とよきいりびこのみこと）が木（毛）の国（現在の栃木県）と木（紀）の国（現在の和歌山県）を区別するため、遠くはなれた木の国という意味で「遠津木（とおつき）」と命名したものが、「トチギ」に転訛したという説。

（出典：栃木県ホームページ）

(2) 巴波川の名前の由来

巴波川の名前の由来にも、いくつかの説があるようです。紹介します。

【渦巻説】

逆さ巴に渦を巻いて流れるという渦巻の巴波川説。

【ウズラ島説】

ウズラ島というのは鶉（ウズラ）という鳥の島。鶉がたくさんいた島があったという説。菌部にあった地名で、その島は湿地帯だったそうです。

（出典：ふるさとお話の旅 栃木）

また、川の西方が「うずら丘」と呼ばれ、うずらがたくさん生息していたことにより「鶉妻川」と呼ばれていたものが転訛（てんか）したもののとも、また、流水が湧水により渦を巻きながら流れていたことによりこの名が付いたとも言われています。

（出典：巴波川圏域河川整備計画）

（３）五者様

千塚小学校の地域に伝わる「五者様」という民話は、江戸時代、日照り続きで枯れた田んぼに、隣村の永野川から水を引くため、村を代表して命がけで水路を掘った五人の名主たちの活躍を描いたお話です。

5 地域教材の教材化と実践事例

（１）真名子小の実践事例：特別活動（クラブ活動）

真名子小学校では、郷土愛を育むことをねらいとして、「ふるさと民話クラブ」において、この八百比丘尼伝説を語り継ぐ学習をしています。八百比丘尼伝説の語り部である狐塚紀和子先生を講師としてお招きして、語り方を教えていただきました。また、その成果を学習発表会や西方文化祭で披露しました。子どもたちは、ふるさとに昔から伝わる伝説を受け継いでいくことの大切さに気付くことができました。



真名子小学校「ふるさと民話クラブ」活動のようす

（２）千塚小の実践事例：総合的な学習、委員会活動

千塚小学校では、「五者様」の民話の詳しい内容が文献に残っていないため、児童は学校周辺のお年寄りを訪ね、話を聞いたり、五人が掘ったとされる水路や五人が祀られている千塚八幡神社などを実際に見学したりしながら、情報を集め

ました。そして、この民話を縦80cm、横100cmの大型紙芝居にまとめました。

また、地域の読み聞かせボランティアの方々とともに、児童自ら台本を作り、発表の練習を重ね、地元の老人ホームや高齢者福祉施設などで発表会を行いました。

校内においては、この「五者様」の大型紙芝居を活用して、読書週間には、図書委員会が中心となって読書集会を企画し、全校児童に披露しました。



千塚小学校 大型紙芝居「五者様」を活用した活動

6 おわりに

現地調査を進めていく中で、道の駅「にしかた」での地域の特産物とお客さんをつなげる様々な工夫、鉄造薬師如来坐像や八百比丘尼堂などを大切を守りつなげてきた思い、そして、地域のよさを実感し心がつながっていく活動など、「ひと」「もの」「こと」のつながりをたくさん感じることができました。このふるさとへの「つながり」を重ねていくことが、児童生徒の地域に対する興味・関心を高めていくとともに、ふるさとへの理解や愛着を深めていくことになるのではないかと思います。

最後に、今年度の調査にご協力いただきました、道の駅「にしかた」管理事務所の中島様、「鉄造薬師如来坐像」管理代表の早乙女盛男様、「八百比丘尼堂」案内の中村良一様、「八百比丘尼伝説」語り部の狐塚紀和子様、真名子小学校・千塚小学校の先生方にはたいへんお世話になりました。紙面をお借りして、お礼申し上げます。